

2026年1月11日（日）公現祭後第一主日礼拝説教

「命と出会いう」井上隆晶牧師
詩編92篇9～16節、ルカ2章22～35節

①【メシアを待ち望む人たち】

イエス様が生まれて40日後に、両親はイエス様を主に献げるために、またいにえの鳩を献げるためにエルサレムの神殿に連れて行かれました。律法に「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」（ルカ2：23）とあるからです。この場合の聖別とは、清められるという意味というより、神様のものになるという意味です。イエス様の献児式です。

その時エルサレムにシメオンという人がいました。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルが慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていました。そして、メシアに会うまでは決して死がない、というお告げを聖霊から受けていました。（25～26節）彼が聖霊に導かれて神殿の境内に入ってゆくと、そこへ両親がイエス様を連れてきました。シメオンはすぐに幼子をメシアだと分かり、イエス様を腕に抱き、神をたたえて言いました。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてください。私はこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」（ルカ2：29～32）彼は「私はもうこれで安心してこの世を去れる」といったので、寝る前の祈りである晩課で歌われるようになりました。この後、神殿を離れず、夜も昼も神に仕え、祈っていた84歳になるアンナという女預言者も近づいてきて神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々に、イエス様のことを話しました。

このシメオンやアンナたちは本当の意味で、メシアを待ち望んでいる人々でした。「神を待ち望むこと」は聖書全体を通してのテーマです。しかしイスラエルの多くの人々たちはメシアを待つことを辞めてしまいました。正確に言うなら、救いを待ち望んでいたのですが、神の遣わすメシアではなく、この世の力のある者を待ち望むようになったのです。これは昔も、今も変わりません。多くの人は自分の願望をかなえてくれるメシアを待ち望んでいます。だからそうではないメシアが来ても誰も分からぬのです。実際、ナザレの人たちは自分たちの気に入るメシアを待っていたので、イエス様は奇跡を起こすことができませんでした。あなたは誰を待っているのか、自分の心に問うてみましょう。

②【待ち続けることが出来るためには聖霊を受けなければならない】

シメオンもアンナもイエス様に会ったことがないのに、どうしてイエス様のことが救い主だと分かったのでしょうか。25～27節まで「聖霊が彼にとどまり」「聖霊から受け」「靈に導かれて」と、「聖霊」という言葉が三回も出てきます。シメオンをイエス様の所へ導き、イエス様を教えたのは聖霊でした。人間は神を知るこ

とは出来ません。神の靈だけが神を知っています。私たちは同じものによって同じものを知るのです。だから聖靈を持つことが重要になります。聖靈を持たなければ神やキリストのことは分からず、聖書も分かりません。聖靈は祈る者の上にとどまります。祈らない者にはとどまりません。いくら聖書を勉強しても、祈らなければ聖靈は来てくれないのでしょう。

待つことと、聖靈を受けることは関係しています。信じられない人は待てません。

●第二次世界大戦の時、アウシュビツ収容所で、クリスマスには解放されるという噂が収容所内に広まりました。しかしクリスマスが来ても誰も解放されませんでした。すると人々はバタバタと死に始めました。病弱な人が死んだのではなく、健康であっても希望を失った人が死んでいったのです。その出来事を通してV.フランクルは「人は希望を失うと死ぬ」と書いています。

未来が信じられない、神が信じられなくなると、人々は待てなくなり、目の前にいる架空のメシア（それは人でも、お金でもいいのです）を求め始めるのです。信じるためにには祈らなければなりません。火を灯し続けるには油が必要です。信仰という「ともし火」を消さないためには聖靈という油が必要なのです。天国に行った時に、油を用意しておかなかつた愚かな乙女がいます。彼女たちの信仰の火はキリストの前では消えてしまったのです。そうならないために、祈りの生活を守りましょう。

③【旧約の終わりと新約の始まり】

「両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。」（ルカ 2:22）と最初に書かれています。イエス様は献げられたのです。これは主が将来、十字架の上に獻げられることのひな型となりました。シメオンはイエス様の上に将来起こる十字架が見えたのです。ですから母マリアに「この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また反対を受けるしとして定められています。あなた自身も剣で心を刺し貫かれます。」（ルカ 2:34～35）と預言します。祝福されるために神殿に来たのに、この子を待ち受けていたのは「いけにえ」となる「定め」でした。この小さい赤ん坊が将来、自分の罪を負って死ぬことがシメオンには見えたのです。それによって自分は罪の呪いから解放され、死から解放されるのが見えたのです。だから彼は「安らかに去らせてください」と祈ったのでしょうか。

キリストが獻げられたことによって、旧約時代の動物を犠牲として獻げるという古い祭儀は終わったのです。イエス様は本当の、唯一の、聖なる獻げものとなつたからです。それはヘブライ書にも書かれています。「この方は、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために毎日いけにえを獻げる必要はありません。というのは、このいけにえはただ一度、御自身を獻げることによって、成し遂げられたからです。」（ヘブライ 7:27）昔は動物のいけにえを獻げることなしに神の前には立てなかつたのですが、今はキリストといういけにえ

を献げることによってのみ神の前に立てるようになったのです。それを記憶し、再現するのが聖餐式です。だから聖餐なしに、神の前には立てないです。聖餐は新しい祭儀なのです。聖餐式の時、パンとぶどう酒を、行列をもって祭壇に獻げるようになってからそれが良くわかるようになりました。2000年前にゴルゴタの丘でキリストがただ一度、獻げられたことを再現することを通して、2000年前の恵みに今この時に与るのです。それは肖（あやかり）です。似たことすることによって同じ恵みを受けるのです。祭壇が必要なのはそのような理由からなのです。テーブルは供されるものを受けたためのものですが、祭壇は獻げられるためにあるからです。獻げられることと、受けたことの両方が必要なのです。教会の祭壇はこの二つを兼ねるのです。

シメオンやアンナといった老人たちは旧約を象徴しています。そこへ新約の象徴である若いイエス様が現れました。旧約と新約は出会い、長かった旧約は自分の使命を終えて新約にバトンタッチしていきます。こうして旧約は新約によって完成します。キリストこそ新しい祭儀であり、新しい契約が始まったのです。

●2世紀のリヨンのエイレナイオスはこういいました。「何のために彼（キリスト）は降って来られたのか。…この方は終わりを初めに、すなわち人間を神に結び合わせるために、終りの時に人々の間で人間となった方である。」

キリストに結ばれるということは、初めに帰れるという事です。聖餐式の時、イエス様の所で罪も死も終わり、すべてが新しくなるのだと感じます。この世の物はすべて古びます。どんな新しいものも古くなり消えてゆきます。しかしキリストは古くなりません。「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方です。」（ヘブライ 13：8）このキリストに結ばれて私たちも新しくされるのです。これこそ本当の新年です。ただ新年という時間が来ても、新しくなれません。なぜならいくら時間だけ新年になってしまっても、昨年の罪と死をもったままでは新しくなれないからです。キリストはあなたの罪を赦し、死を飲み込み、新しくされます。

その昔モーセは動物の血を民とすべての祭具に振りかけて、「これは神があなたがたに対して定められた契約の血である」（ヘブライ 9：20）と言って、民を清めましたが、今はキリストが「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。」（マタイ 26：28）と言って、キリストの血を飲むことによって私たちの罪を赦されるのです。血は命だからです。今日もその新しい祭儀を祝うのです。感謝です。今年も、キリストとつながり、新しくされた者として生きてゆきましょう。